

三 墓所の釜場へ杭を打って来ること

ある夜、若い衆が打ち寄っているいろと雑談しているとき、一人が言うのには、
 「闇の夜に墓所へ行って、釜場へ杭を一本打ってくることは出来ないものらしい。杭を打とうとすると、いろいろと魔がさして、打ちこむことが出来ないものだそうだ」と。一人が進み出て、

「なんで打たれないことがある。自分ならばきつと打てる」と言う。

この男は、前からものごとを気につけない者で、さびしいなどということを知らない者だった。みんなが、

「これまで、魔がさして、打ってきた者はいない」

「お前が打ってきたら、我々は酒を買おう」

などと言うと、その男は、

「それならば、今宵やろう」

と言う。

それで、杭を一本けずって渡した。

その夜は、真の闇で、ことに雨が少し降り出してきたのだが、男は支度をして、二町(約二二〇メートル)ばかり離れた墓所を目指して出かけて行った。友達たちは、「本当に墓所へ行くのか、心許ない」と言っていて、二三人が後から見え隠れしながらついて行った。

男は、小謡をうたいながら行った。墓場に着くと、あの杭を取り出して、藁打ち槌を持って、すとしんと打つ。場所柄なんとなくその音、地の底の金輪際まで響いて物さびしく思うところだが、その男は杭を揺るがし揺るがしして見ながら、しっかと打ち込む。

さて帰ろうとすると、何やら後ろからしっか押しさえて引きもどす。男が、

「何奴め、何奴め」

と引く張るが、引く張っても引く張っても、何としても何としても放さない。

男は「さては、魔がさしたか」と薄気味悪くなって、また力いっぱい入れて引くのだが、引く張っても引く張っても放さないのです、とうとうたまりかねて、

「やあれ、やあれ、やあれ」

とわめきだした。

その時、見え隠れしてついて来た友達たちが走りつけて、

「どうした」

と言うと、

「何かが後ろから押さえて、放さないのだ」

と言うので、

「さては」

と、そばに寄って見ると、着ていた毛蓑けみのを杭かきにくるんで打ち込んである。

友達たちは大笑いをして、二人がかりで杭を引き抜き、蓑をはずして、連れだって帰った。

前々から、人の言い伝えていることなどは、自分の考えをおし通して打ち消して争うべきでない。これがすなわち、「魔がさした」ということであろうと、人々は言った。

四 隅すまのば様ということ

夜中に静かな寺へ行つて、四人で座敷の四隅よすみにかがんで、燈を消して、四隅より各々が座敷の真ん中へ這はつて出て、一人がそれぞれの頭を探つて、「一隅ひとすみのば様、二隅ふたすみのば様、三隅みすみのば様、四隅よすみのば様」と頭をなでてみれば、自分の頭とともに五つある。何度なでて

も五つある。

また、もとのように四隅に戻つて、別の人が前のように、「ば様、ば様」と、ひと頭ずつなでてみても、自分の頭とともに五つある。

これは、むかしから若い衆が打ち寄つたときに戯たむれに遊んだことである。自分も十三四のころ、友達と連れ立じようけいつて常慶院じようけいに行つて、このことをして遊んだが、幾度も出直し出直して頭をなだまわしたが、四つの頭があつて、自分の頭とで五つである。

牌寺はいじ（菩提寺）で、常々近所なので遊びにいく寺なのだが、なんとなく小淋こさびしくなつて心迷うものである。怪異のことなど、あればあるものである。若い殿原（男子の尊敬語）たち、隅のば様して遊ぶべし。

〔参考〕部屋の隅にいる神霊を呼び出すという遊びと思われる。泉鏡花「一寸怪」（一九一〇年）。大

鳥建彦「スマタラ来い」（『西郊民俗』第一〇六号、一九八四年）。常光徹「隅のば様と現代の民

話」（説話・伝承学会編『説話の始原・変容』一九八八年）。